

「oar press / 明津設計」

oar pressのウェブサイトでは、トップページの空間においてオンライン上の年間展示連載を行っています。

2024年はグラフィックデザイナーの明津設計が担当し、2月1日から一年間の間に合計6枚のグラフィックが連載されました。

本連載について、明津設計(浅田農)にインタビューを行いました。

(2025年3月の森山邸での展示に寄せて取材・編集)

—

oar: 最初に浅田さんの自己紹介と、「oarのトップ画像連載についてどのような印象を持ったか」についてお聞きできるでしょうか。

明津: グラフィックデザイナーとして、書籍やポスター・フライヤー、ロゴマークのデザインなどを主にやっています。

まず企画自体に、見目さん(oar press主宰)の「場の試み」の気持ちが溢れてる気がして良いなあと思いました。

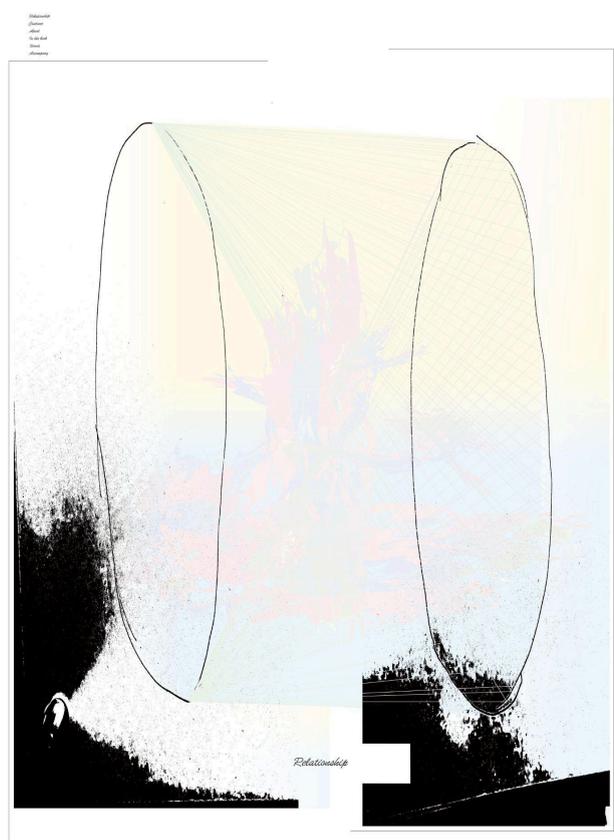
1枚のトップ画を単発で依頼するのではなく、1人の作家の1年間かけての連載という企画の設計が、oar pressが単に「アートブックの出版」を目的にしているんじゃなくて、その手前の、oar pressがアーティストとどう関わりたいのかという気持ちが伝わってくるなど。

依頼をいただいたときに思い出したのは、小学生の頃、毎日のようにパソコンを開いて「お気に入り」に入っているホームページを端から端まで巡回して、トップ画が更新されたり新しいコンテンツが増えることを楽しみにしていた記憶でした。

テーマは自由に設定していいとのこと、アーティストではない自分がなにをすればいいのかだいぶ迷ったんですが、「架空のoar pressというお店の、レジの後ろに飾るポスターを作る」...と、想定してみたら頭がすっきりして考え始めることができました。

はじめにいただいていた企画書にも「床の間」というキーワードが書かれていたので、ふりかえると「床の間」と「レジの後ろ」は近い話なんですけど...「レジの後ろ」と考えたほうがどうしても現実的な実感がありました。

それとせつかく1年間という長い期間をいただいたので、作り溜めをしないで2ヶ月に1枚ずつ、更新日の前に都度都度制作して、6枚の中にブレや幅が出るようにしてみようと決めました。シリーズの6枚をまとめて制作してしまうと、どうしても並びでの見え方や統一感を気にしすぎてしまう気がしたので。



明津設計《#1 Relationship》2024

oar: トップ画像の企画のこと、そのように捉えてくださって嬉しいです。「場としての本」を思考したり、長いタイムスパンで作家と関わりたい意識はたしかに強いのかもかもしれません。

「お気に入り」のホームページの話も、浅田さんとは年齢や出身地も近いこともあって感覚が分かるように思います。

あの頃はザッピングするように多様なSNSメディアを開いたり、あるいは情報が自ずから飛び込んでくるというよりは、こちらから個人個人のウェブサイト赶赴てコンテンツを一つ一つ撮取る、能動的で手触りのある交流があったことを思い出します。「キリ番」とか、懐かしいですね。

以前、浅田さんにデザインいただいて刊行した『Heptapod Solresol Ruins』の展示記録集でも、写真をプリクラのような角丸デザインにさせていただきましたが、所々あの時代の質感を感じる気がします。

一年間連載いただくにあたって、季節を通じて作品を掛け替えてお客様を迎える「床の間」の要素は考えていましたが、本と作品を扱って発信する場所と考えると「レジの後ろ」というのは的確だなと思いました。

この企画は年間を通して作家の方にいつもはしないことで実験したり遊んでいただけたらと思っている部分もあって、少しずつその経過を見れたらと考えていたのでそのように取り組んでいただけてよかったです。

受けてくださった時に、現在興味関心のあることで、「線」と「色」について色々と試みてみたいと伺ったと思います。そのあたりのことも、どのように考えられているか改めてここで伺えると嬉しいです。

浅田さんのグラフィックを見ると、その存在の揺れやブレ、見えない単位の動きのようなものを肯定して補助線をひくような、しなやかさを感じます。

それと同時に、今回のこのパステル調の色味は今までのグラフィックのなかではあまり拝見していなかったと記憶しているのですが、非常にしっくりする感じがありました。

その辺り、意識されていることなど伺えたらと思います。

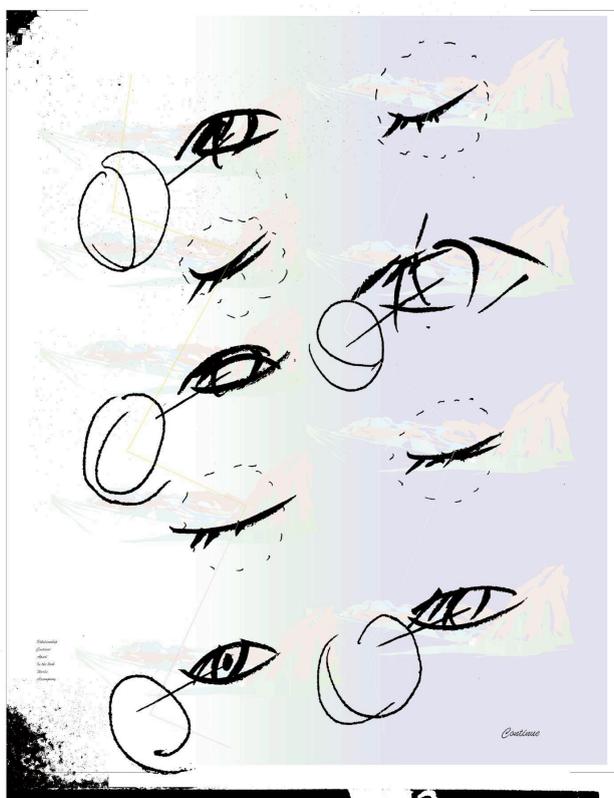
明津：昔のインターネットの、「能動的・手触り」っていうのもわかります。

自分のいまの情報の受け皿はどう考えてもSNSが中心にあって、しかもフォローしてる人が発信してるものだけを受け取ることがほとんどなので、今年の頭あたりに、インスタの検索画面から見られるおすすめの記事をザッピングするようになってみるっていうのをやってみたんですが...それはそれで時間のすごし方としてなんか微妙だなと思って、いまはやめました。

昔がよかったとかは思いませんけど、いまのやりかたとは違うやりかたで「今」の情報を受け取る方法はないかなとずっと思ってます。たぶん自分の習慣づけの問題も大きいんですが。

それと、仕事としてSNSでの宣伝用画像のデザインを頼まれることがありますが、スマホやSNSで用意されているサイズや質感のフォーマットを、紙とは違う悪い制約として捉えてしまい、うっすらと否定的というか諦めを漂わせたままデザインをしてしまっていたことに最近よく反省します。

iPod nanoを初めて見た時や、iPhoneを使うようになったときの高揚感は、もうすでに10年20年も前のことになってしまいましたが、あの高揚感はむしろサイズが小さいことだったり画面のツヤツヤという、いま制約や制限と思われがちの部分は自分が高揚感を感じる部分だったはずで、そもそも、紙のA4フライヤーだってB1ポスターだって、同じようにある程度の定型や制約がありますし、どんな媒体であろうと高揚感を得られるものはつくれるし、つくりたくないとな...と。これは地味とか派手とかは問題ではないはずで、地味でも高揚感を感じるものはあるので。話が前後してる気がしますが、つまり自分も今回のトップ画像連載しかりいまのスマホの環境をもっと楽しむことと、同時にスマホ以外のバラエティをもっと楽しむことにもっと意識的になったほうがいいなと思ってます。



明津設計《#2 Continue》2024

それは上で話した、昔、ひとのウェブサイトを訪れるときの楽しみにもつながっている気がして、たとえばSNS以外の場で日記を書かれている人のページを見に行くとか、SNSを橋にしてそういう外部の場、オンライン・オフライン問わず、にアクセスしていくことはやっぱり面白いので。

線と色はどちらも自分の実感の問題が中心にあると思ってます。実感のともなわないものは簡単にいえば嘘くさいものになるのではないかなあと。

色や線は誰の発明品でもないもので、結局誰が使おうとしても大きくくれば借り物なんです、借り物のままかそこから抜け出しているのかの違いはたぶんあって。

当然自分が使いたいから、好きだから使っているわけではなく、目的、自分の場合は依頼という言葉にも置き換えられるそこに対しての都度都度の選択なんです、目的が定まって「この仕事は青が基調だ」と思っても、どういう青にするか、そして青の隣の色の問題を解消するのか...自分の実感がともなう「これだ」と思える借り物感のない青にすることにいつも時間がかかってます。

これはいまにはじまったことではなく、小さい頃から鉛筆で絵を描くのは楽しいのに絵の具とか色鉛筆で色を入れようとすると、うまくいかなくて...美大受験の時も色彩構成の課題でかなり苦労したりとか...

昔からビビッドな色彩や組み合わせは自分の頭では想像もつかない領域でそして憧れで、一方、今回の連載で作っているビジュアルで使われているような淡い色調は自分の頭ではわりと想像をつけやすいけどどうも仕事の中では実感をともなう完成までかなり時間がかかるっていうのがずっと続いていて、その悩みの中で、いままでのデザインの仕事の中では意識的にビビッドな色調を訓練する気分で、わりあい多く使ってきたと思います。

ですが去年の暮れに、小さい頃に散々見てきた水彩で着彩された昔のポケモンの絵や、鳥山明のカラーイラスト、サンリオのキキララの絵...そういう小さいころから好きだった淡い色彩のものを改めて見ていたら、なんとなく、いまなら昔とは違う色のとらえられかたができていくかもという気がして、パステルカラーを基調に、色彩を氾濫させるようなこの感覚を意識的に繰り返し実験して発展させてみたい、と思っていた時期に...今回の連載の依頼がありました。

今回の連載ではoar pressという依頼主はありつつも、たとえば展覧会の宣伝物をデザインするのは違って、たぶん自分の実感とか個人的なものをいつもよりも多めに持っていかないと作れないと思ったので、色に関してもそういう意識のもとで使っています。

『Heptapod Solresol Ruins』の角丸も、たぶん昔の記憶からひっぱってきたっていう実感のもとにデザインに使っているんだと思います(笑)。

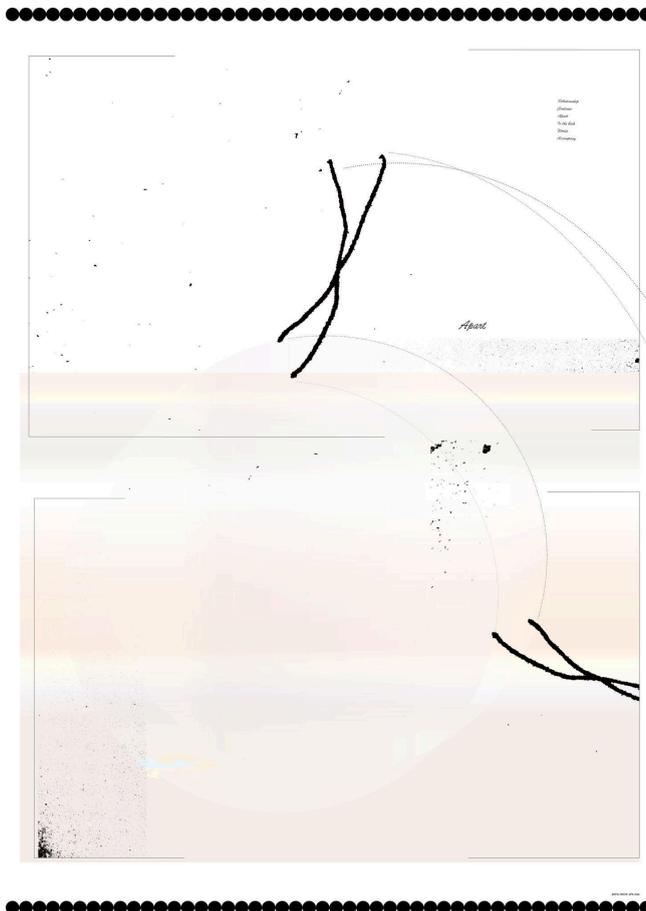
線とか色も似たような感じで。

oar: たしかにそうですね。いまは昔に比べてよりメディアの選択肢が増えて、そのせいかそれぞれの制約や制限のあるなかで何かに偏りがちになってしまう傾向があるのかもしれないです。

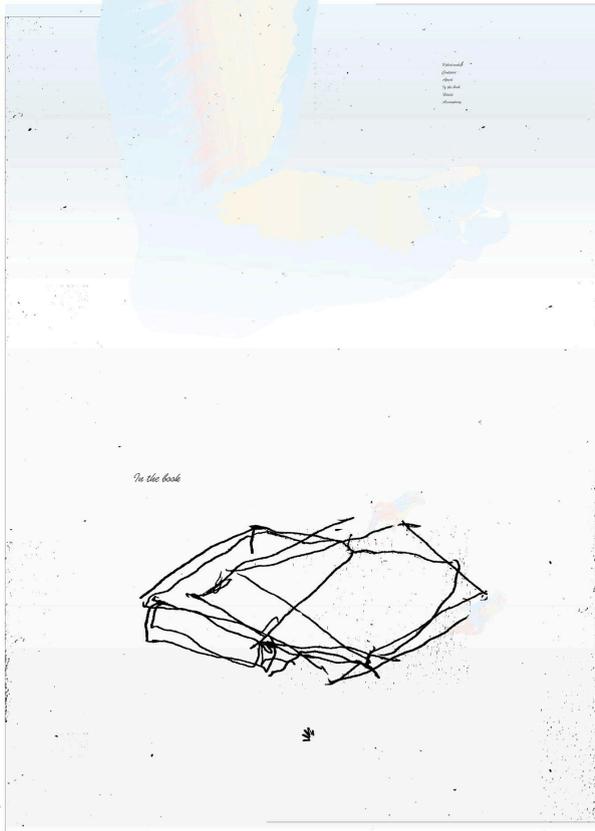
そのなかで今あるそれぞれの制約も楽しんでみよう、高揚感を得られるものを追求する、というのは私も共感します。

いまのやりかたと違うやりかたで「今」の情報を受け取る方法、浅田さんの作られている「予定帳」もきっとその一環ですよね。太陽と月の周期、たとえば二十四節気や月の満ち欠けを併記したスケジュール帳は見かけることも多いですが、浅田さんのこの「予定帳」はそれらとはかなり趣が違うと思います。また、これは自発的に始められている企画というのも気になりました。制作に至った経緯を教えてくださいませんか？

線や色の実感、前にCSLABのワークショップでも「借り物ではない線(形)」が大切と書かれていたのを思い出しました。色についても、今回の連載でそのように試行錯誤していただけて嬉しいです。



明津設計《#3 Apart》2024



明津設計 《#4 In the book》2024

明津:さかのぼると2018年頃に、PERMINUTEというブランドと仕事をしていたときに、半年分の日付をすべて一直線上に並べた縦に長いカレンダーを作ったことが、そもそものはじまりです。5日の平日と2日の休日って人間の体とはなにも関係ないなとか、カレンダーをめくった瞬間に「31」が「1」に変わることの違和感になにか抵抗できないかと考えて作りました。

その時に月の満ち欠けはカレンダーの日付と関係ないということを思い出して、そのカレンダーでは月の満ち欠けとその日の南中時間(月が南の頂上にくる時間)を記載しました。

「予定帳」は2023年の4月にはじめて作ったんですが、単純に自分が使いたい手帳が売ってなかったから自分で作ろうと思ったことが制作のきっかけです。

普段自分が使っているメモ帳と同じ文庫サイズ、バーチカルタイプ、メモページは不要、持ち歩くのは半年分のスケジュールで十分、とにかく軽くして、自分が普段持ち歩くカバンからさっと取り出してスケジュールを確認できること。

そういったわかりやすい機能面に加えて、夏と冬って日の出の時刻はどれくらい違うんだろう、とか、月がのぼる時間に法則ってあるんだっけ、とかそういう小学校の理科の授業で習うような基本的なことをあらためて知りたいなと前々から思っていたので、太陽と月のスケジュールを付け加えました。

小さい頃は、大人になれば誰でも相対性理論がなんなのかわかるようになるものだと思っていたんですが、実際はそんなことなく、でもいま過ごしているこの空間はあの理論に基づいてまわっているのに、ほとんどの人がそのことをよくわからないままにいる...ということが根っこにある気がします。

相対性理論はわからなくても、月の動きくらいなら図化することですこしだけなにかわかるんじゃないかなと。

小学生の頃、下校するとき学校の外の階段を降りて学校側を振り返ると昼間なのに月がのぼっていたのを見て、たしかその頃、月が昼にのぼることを知った直後だったからだと思うんですが、その月のことがやけに印象的で綺麗だなと思ったのをいまでも覚えているんですが、いま地図を見て方角を確認してみると、あのとき見た月はたぶん上弦の月のあたりだったんだということがわかります。

数年前、早朝に散歩をしていたときに、明け方特有の白けた空の低いところに満月に近い月があって、明け方にこんな綺麗な月が見えるなんてラッキーだなと思ったんですが、満月は必ず明け方に落ちるものなんだっていうのを予定帳を作る過程で理解しました。あの月をまた見たいなと思ったら満月の次の日に早起きして西の低い空を見ればいいんだ、って。

予定帳のコンセプト文では、そういう自分の体外の時間をあらためて日々感じることで、「新しい時間感覚の器官の芽」を見つけられるんじゃないか...と書いています。正直それを身につけることは難しいと思いますが、頭で考える限りは可能だと思います。

予定帳の説明をしているとちょっとうさんくさい言葉を多用してしまってるなと思うんですが、でも太陽が登る時間に起きて、太陽が沈む時間に寝たら、自分の体って結構簡単に変わる。あるいは、太陽にあたることで体の中でビタミンがつくられて...とか、日照時間の少ない地域は鬱病になりやすい...とか。太陽や月は自分の体の大前提としてちゃんと認識したほうがいいんじゃないかなと。

一応付け加えておくと、なにか「正しい人間のあるべき姿」を見ているわけではまったくくないです。でも絶対に体は変わることができるし、変わったらなにか面白いことが起きる気がする。

すこし話がずれますが、「目」っていう器官は大昔に植物が陽を浴びるために太陽、光を探す器官が動物に混ざってできたみたいな話があるんですが、そういうことも思い出します。

建築は体の動きをゆるやかに誘導することで人間を変えてしまう力を持っていると思うんですが、それに近いことをグラフィックデザインからできないかなと思ってます。

「情報の受け取り方を意識的に変えたい」という話と紐づけて言えば、いまの自分の体の感覚の外にあるものに、もっと自分から「脇見」をしにいきたいという気持ちです。

「脇見」でいえば、ついこのまえ、花輪和一の漫画に出てくる「あっこれはひめじょおんだな ああ.....草がわかるのってすごく自分がうれしいな」というセリフをパートナーに教えてもらったんですが、単にそれに近い感覚もかなりあるだろうなとも思います。「太陽／月の動きを知っていることは、体がとっても嬉しいな」という感じ。それだけでかなり体って変わったな、と。

たとえば細い月を見て、それが新月の後なのか前なのか、自分は予定帳をつくりはじめて3年目で、ようやくそれがわかるようになりました。3年もかかりましたが、即席の知識ではないのでたぶんこの先わからなくなることはないんじゃないかな...と、3年でそれが身についたことは結構嬉しかったりします。



oar: 現代で効率よく生きるための道具として使われることも多い手帳というメディアに、「脇見」という要素を入れられているのは素敵だなと思いました。

予定帳には月の出・月の入りの時間のほかに、すでに月の巡りのような円周が描かれていて、そういう気配の上に予定を書くという経験が面白かったです。まっさらな状態でない場所に文字を上書きするのが最初は躊躇われたのですが、その上に書いてみると、自分の予定というも他者がいる環境の上に並走・重なっているだけとも思えるような、不思議な感触を憶えました。たしかに体が変わる感覚ですね。

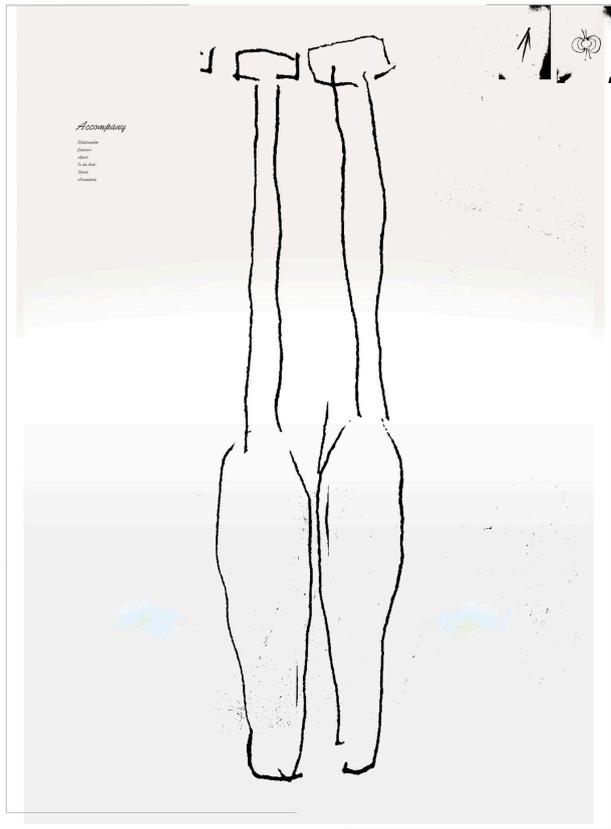
連載で浅田さんが制作されたモチーフや細かな要素もとても面白かったので、そのあたりもお聞きしたいなと思いました。本を足で踏んづけている時もありましたし、たくさんの目があらわれるイメージもありましたね。

あとは「浅田さんといえば」と私のなかで思っている、藁半紙の粒々のような網点だったり、今回多用されていた墨が跳ねたり擦れたような表現、これも特徴的で、浅田さんのなかでこれらがしっくりくる質感を持ったその所以も聞いてみたいです。

それといま(2025年1月時点)、木下理子さんの本を作っていますが、判断に迷うときにこの本が30年後、100年後にどうなっているかを考えて決断を下すような、大きな時間軸の中で仕事をされていることも気になっています。

浅田さんが捉えている「今」本を作ることの射程が重なったり伸びたりすることが面白いと思うのですが、いま気になる視点、どういったところに今後感覚を伸ばしたいか、気になるトピックがあったら教えていただけると嬉しいです。

明津: ポスターのモチーフ・コンセプトについて、これは一番最初の質問に繋がりますが、今回の連載を依頼していただいたときに、見目さんから最初にいただいた依頼概要にoar pressの6つのコンセプトが書かれていました。そのコンセプトが自分の普段のデザインの態度、付き合い方にかなり似ていると感じ、これをテーマにすれば自分の体重もうまく乗せながら連作のグラフィックを作れると考えました。



明津設計《#6 Accompany》2024

このコンセプトはoar pressとして外に向けて表明しているものではなく、あくまで見目さんの中で指針にしている事ということだったので、テキストを短いキーワードに変換し、それぞれのポスターのタイトルにしたのが「Relationship / Continue / Apart / In the book / Words / Accompany」です。

そのひとつひとつを、すこし具体的にしながら、自分の解釈を加えながらグラフィックに変換していきました。

目のポスターは「Continue」、作品の永続性について、作品はどんなときに残っていくのか、残すためにはどうしたらいいのかを考えていて、残る芸術は目の前にその作品がない時にその作品を思い出す時間が重要なんじゃないか、と。

たとえば千葉のDIC川村記念美術館の常設展がすごく好きですが、「あの作品を見たいな」と定期的に思い出して、見に行きます。これは普段、あちこちで行われる企画展とはすこし違う鑑賞の性質があって。絶対ではないですが、「行けば見れる」という場所があることが、常に頭の片隅に残っている、この残っている状態も作品の状態のひとつだと思います。

一方で、10年前に見た友人の作品のこともたまに思い出して、いまどこにあるんだろうと疑問に思います。自分は作家ではないので、このあたりの感覚がすこしずれているかもしれませんが、どうして過去作を見れる機会ってこんなに少ないんだろうと少し残念に思うことがよくあります。また見たいと思うことや、たまに出てくる「再評価」という言葉、あれも誰かが覚えていたり目を閉じている時間、晒されていない状態とのオン・オフが深く関わっている気がしています。そういう普段考えていることが、作品の永続性、目を開けたときに見る作品と目を閉じたときにある作品の状態の話に結びついてこのポスターになりました。

足と本のポスターは「In the book」ですね。これはoar pressのコンセプトでは「本という空間の中で作品が展開されること」とあって、作品の永続性とも関係していますが本という具体的な物に関しての話で、アートブックというジャンルの本は文庫本なんかに比べて大切なものとして扱われることが多いと思いますが、5000円のアートブックがあったとして、それってアートブックの中ではわりと平均的な値段ですが、小説だったらかなり高価な本だと感じます。だけどそんなお金を払って買った、アートブックを家で何回開くんだろう...と。

自分は本のデザインに携わることが多いですが、本の細かな仕様、紙の選択や製本方法を考えているときに、やっぱり「本は開かれてこそ」という気持ちが常に強くあって、大きさに言えば本はもっと雑に扱うべきなんじゃないかと思えます。

なのでこのポスターでは、足から本の中に入っていくという意味に加えて、足を大きく配置することで本を神聖化しない、みたいなそういう気分も入れました。

「ノイズ」と、先ほど言っていた「借り物の線」についての質問に移ると、デザインをするなかで「温かい」ことを表現するためには、共通認識として自分以外の人も「温かい」と感じる表現を借りてくる必要があるんですが、自分が借り物ではない「温かい」表現というのは、誰も表現したことのない「温かい」の表現をさがすということではなく、目の前のデザインに必要なのはどういう種類の「温かい」なのかを考えれば考えるほど、既存の温かいという漠然とした括りでは言い表せないから必然的に借り物ではない「温かい」をデザインで展開させなければいけないと思っています。

これはデッサンと近い行為で、誰もが思い浮かべるアイコンのような「木」ではなく、自宅の庭の「この木」をデッサンするように...というのが「借り物ではない線」の話です。デッサンも油断するとすぐに「デッサン的な表現」になってしまうように、デザインも油断するとすぐにデザイン的な表現になってしまうので、そこにはいつも気をつけます。もちろんデザイン的な表現を利用する場面も多々ありますが、すべてがそうなるとうまくいかないのが、毎回苦心します。

今回のグラフィックに使用している線描は大学生のころから使っているものなんですが、当時、「その絵が、嘘かどうか」ということをずっと気にしていたのを覚えています。

小さい頃から絵ばかり描いてきて美大まで入っても、自分の右手で書いた絵や線が全部嘘っぽいものに思えて気に入らなくて、そのコンプレックスから「嘘かどうか」なんていうことを考えていたんだと思います。デッサンをしなければいけない場面でも出てきてしまう右手の線の癖は、言い方を変えれば自分の個性なのかもしれませんが、自分の個性というにはすごく浅いし、嘘くさくて手放したいものだったし、自分が作りたいデザインに向かえるものではありませんでした。このままだと自分がやりたいことがなにもできないなと考えていたときに、左手で書いたら全部捨てられるんじゃないかと思って。やけくそというほどの強い気持ちもなく諦め半分で適当にというか、やってみたのがこの線描のきっかけで、その線のどうしようもなさが自分にとってはとても落ち着くものでした。

なんか揺れてるいびつな線ですが特にしっくりきた部分は「線の味」みたいなことを自分で全く感じていないところです。

基本は、丸は特に感情も無いただの丸でしかなくて、パソコンの円形ツールを使って円を作るときと同じような気分で書いています。常に下書きのままでもいえるかもしれません。嘘でもないし、本心というわけでもなさそうな。

このどうしようもない感じというのは、わら半紙のようなミスプリントのような粒子を画面にばらまく工程、印刷の紙選びのときの趣向にも通じていて、嘘でも本心でもない、それくらいの気分で、線だけでなくグラフィック全体も、ふと偶然見かけた一瞬を右から左に流すようにして作りたいといつも思ってます。どうしようもない紙とインキへの諦めとか安心感、あるいは弱すぎるがゆえ過激であるみたいなことを、存分に味わえるものを作りたくて。

どうしようもないものっていうのは、これ以上やってもしかたないっていう諦めと完結の両立みたいな場所です。そこを両立させることで、なにか大事な隙間が生まれるんじゃないかと。

遡ると、物心ついたときから綺麗な服、外行きの服、体にぴたっと合う服とか、あとはマフラーとかも苦手で、洗いざらしのザラザラとした布の感触とか肌と服のあいだの空間が重要で、パステルカラーとか彩度の低い色合いが好きだったのも、いまにつながっている感覚ですが、それがなぜなのかはわかりません。いまはマフラーとかもそこまで気にならなくなりましたが、やっぱり根っこにはあって隙間の感覚に通じています。

本を作っているときは100年後のこと、たとえばいまつくっているこの本が100年後の古本屋で売られている光景を想像したりします。

大きな理由は本は自分の部屋に長く置かれるものだから...なのですが、「本は長く残るもの」とつい言ってしまいましたが正直いって簡単に破けるし燃えるし水にふれればすぐふやけるし、ゴミの日にしばって捨てるのも簡単です。すこし前...5年くらい前までは自分も本は長く残るものだから

...と思っていたんですが、たとえばイサム・ノグチの石彫、グランドデザインの仕事をしていると、本って全然耐久性がないんだなと考え方が変わりました。

だけど同時にわかったことは、本は長く残そうという意思があつてこそ残るものであつて、本は人にとって長く残そうと思えるものになれるということです。

なので、前は100年後の古本屋に訪れた人にも「良い」と思ってもらえるものを作りたいと思つていたんですが、今は同じ100年後の光景を想像しながらも、100年間「残したい」と思ってもらえるものをと考えます。寿命が長いから良いものを作るのではなくて、寿命を伸ばすために良いものを作りたいという感じです。

本は当然内容が肝で、内容に対して嘘のデザインはできないから、デザインにできることはごく僅かだけどその僅かなところで内容さえ左右してしまうことがあるから、デザインするときはずごく慎重になります。そうやって作ってないと、本はあっさりとゴミの日に出されて終わるような本当に弱いものなので。

その軽さは本の良さでもあり好きなところですが、そんな手軽なものなのに手放せない、燃やせない、と人間に思わせるところに本の大切な部分があると思つています。